天草本平家物語の助動詞ラウ

福田嘉一郎（ふくだ よしいちろう）

1

中世日本語の助動詞ラウは、古典語の推量助動詞ラムに直接さかのぼる形式であるが、中世後期には衰退の傾向が強く、ラウの表す意味にはいまだ明らかでない点があるように思われる。本稿では、助動詞ラウのまとまった数の用例が得られる資料として天草本平家物語をとり上げ、天草本のラウと原拠本の表現との比較・観察を中心に置きつつ、中世後期の口語における助動詞ラウの意味や機能について考えてみたい。

第2章では、中世語助動詞ラウに関する先行研究を概観する。

2

中世語助動詞ラウに関するおもな先行研究としては、次の(1)〜(4)のようなものがある（〔　〕筆者）。

(1) 助動詞ラウは、意味のうえで、助動詞ウのあらわす意味領域に含まれるようになった。また、助動詞ウよりも明確に推量表現であることをあらわせるとともに、強い語感もともなっていたと考えられる。それゆえ、強調の係助詞コソ・ゾの結びとして用いられやすかったのであろう。また、疑問の係助詞カにも同様の理由から用いられたのであろう。助動詞ラウは、推量表現を強調する役割をになっていたのである。中世末期において助動詞ラウは係助詞の結びとして用いられることで、その存在意義を保っていたと考えられる。

（村上1979：p. 860）

(2) **中世口語の推量体系**——想像分別型

形態	分担性		めだつ傾向
ラウ	主観的	強	(1)現実的時制的分担体制の解消。
ウ		弱	(2)想定作用度別分担体制への再編。
ウズ	客観的		(3)推移を円滑化するウズの盛況。
マイ	両面的		(4)ムード性の複合性の存続。

（山口1991：p. 32）

(3)〔略〕中世の口語で過去推量の表現として用いられた「つらう」は、天草版平家物語を検討した限りにおいて、「けん」の有していた用法のうち、「現実界と密着した形で発想される」〔山口1991〕ものを切り捨て、過去の事実を想像し、推量する用法に限られてきていると言える。　(木下1993：p.6)

(4)a.〔略〕『天草本平家物語』における文末終止の「つらう」がいかなる性質の推量を表わすかについて見てきた。疑問詞と共起することが少く、逆に「こそ」と呼応する用例が多いことで示されたように、過去の事柄について、疑いもなくそうであったのだという言語主体の確信を表わし、時には、その過去の事柄に対する詠嘆の気持までも含意していると、大筋においてまとめることができる。　(山田1995：p.90)

b.〔略〕『玉塵抄』の「ツラウ」81例の用法については、文末終止にのみ用いられ、また、「コソ―ツラウ」の用例が多数を占めることが示すように、確かな推量を表わす傾向も『天草本平家物語』と同様であった。

(同：p.93)

(1)～(4)は、抄物や軍記などを含む、さまざまな中世語資料に依拠した考察の結果である。

第3章では、天草本平家物語に見られる助動詞ラウが、原拠本のどのような表現をうけたものであるかを観察する。

3

天草本平家物語の原拠本については、清瀬1982に従い、(5)のように考える。

(5) 原拠本：○覚一本：日本古典文学大系32『平家物語 上』

(岩波書店、1959年)

→天草本 pp. -107

○慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫編『百二十句本 平家物語』

(汲古書院、1970年)

→天草本 pp.107-196, pp.228-

○高橋貞一校訂『平家物語 百二十句本』(思文閣、1973年)

→天草本 pp.196-228

さて、天草本の助動詞ラウが原拠本のどのような表現をうけついでいるかについて調査した結果を表にすると、(6)のようになる。

(6)

		天草本		
		ラウ	（ウズ）ラウ	（ツ）ラウ
原拠本	ラム	21	2	2
	（ムズ）ラム	1	5	
	（ツ）ラム	1		3
	（タル）ラム			3
	ム		2	
	（ナ）ムズ		1	
	ケム	3		12
	（タリ）ケム			2
	その他	3		1

天草本に見られるウズもツも前接しないのラウのもととなった原拠本の表現は、次のⅠ～Ⅳおよびそれら以外のⅤという五つの型に分けることができる。例文の末尾に付した数字はそれぞれの用例の存在頁（b.に関しては(5)に掲げた各本の頁数による）を示す。以下(86)まで同様である。

Ⅰ　(a.天草本）ラウ＜（b.原拠本）ラム：21例

(7)a.　けさの清盛の気色さるものぐるはしいこともやある<u>らう</u>とて（43）

b.　さる物ぐるはしき事も有<u>らん</u>とて（170）

(8)a.　成親卿のござる所をわれに知らせまいとてこそ申す<u>らう</u>とて（59）

b.　成経にしらせじとてこそ申<u>らめ</u>」とて（186）

(9)a.　重盛まことにさこそござる<u>らう</u>（72）

b.　まことにさこそおぼしめされ候<u>らめ</u>（212）

(10)a.　礼紙にこそある<u>らう</u>と言うて（73）

b.　らいしにぞある<u>らむ</u>とて（214）

(11)a.　まことにさこそおぼしめす<u>らう</u>（75）

b.　少将「まことにさこそはおぼしめされ候<u>らめ</u>（215）

(12)a.　魔縁のきたるでこそある<u>らう</u>（104）

b.　まゑんの来たるにてぞある<u>らむ</u>（104）

(13)a.　あはれこれは実盛でかある<u>らう</u>（171）

b.　斎藤別当真盛ニテヤ有<u>ラン</u>（435）

(14)a.　木曾が勢はこの辺にこそあるらう（244）

b.　此辺ニコソ有ラメ（494）

(15)a.　そもそも御辺は平家の方ではさだめて名ある人でこそあるらう（274）

b.　名アル人ニテコソヲワスラン（539）

(16)a.　熊谷これは平家の公達でこそおはすらう（276）

b.　平家ノ公達ニテソ御座スラン（548）

(17)a.　重衡は今度生け捕りにせられていかばかりのことを思ふらうとて（279）

b.　イカハカリノコト思ラントテ（553）

(18)a.　こよひははるかにふけゆくらう（282）

b.　今宵ハ遥ニ深ケ行クラン（556）

(19)a.　さては首どもの中にこそあるらうとて（285）

b.　頸トモノ中ニソ有ルラントテ（565）

(20)a.　都にさこそわれをおぼつかなう思ふらう（287）

b.　覚束ナウ思フラメ（568）

(21)a.　さこそ心苦しうおはすらう（289）

b.　サコソ心苦シクヲワスラン（570）

(22)a.　上人もさぞおぼしめすらう（294）

b.　サソ思召レ候ラン（578）

(23)a.　門違ひでこそあるらうと言うて（308）

b.　門違ヒニテソ候ラントテ（596）

(24)a.　かやうに預からせらるるも前世の宿縁でこそあるらう（340）

b.　先世ノ宿縁ニテコソ候ラメ（655）

(25)a.　北条げにもさこそおぼしめすらうと申して（384）

b.　真ニモサコソ思玉フラメトテ（750）

(26)a.　ただ悪しうてこそ遅うはあるらう（389）

b.　悪ウシテソ遅カルラン（755）

(27)a.　それはさぞあるらう（389）

b.　ソレハサソ有ラン（755）

Ⅱ　（a.天草本）ラウ＜（b.原拠本）（ムズ）ラム：1例

(28)a.　いかにおのおの頼りなうおぼしめすらう（316）

b.　便リ無ウ思召レ候ハンスラン（608）

Ⅲ　（a.天草本）ラウ＜（b.原拠本）（ツ）ラム：1例

(29)a.　都にはただ今わがことをこそ思ひ出すらう（288）

b.　思ヒ出ツラメ（568）

Ⅳ　（a.天草本）ラウ＜（b.原拠本）ケム：3例

(30)a.　少将の心のうちさこそはたよりなかるらうと（38）

b.　さこそは便なかりけめ（166）

(31)a.　樋口がわが党に結ぼほれたもさこそ思ふらう（250）

b.　サコソ思ケメ（502）

(32)a.　いかに一門の人々のわれを憎う思はるるらうと後悔めさるれども（294）

b.　悪ウ思レケント（577）

Ⅴ　（a.天草本）ラウ＜（b.原拠本）Ⅰ～Ⅳ以外：3例

(33)a.　成親卿ここで失へといふ儀にてこそあるらうと聞かれたれば（55）

b.　新大納言「是にて失へとにや」と聞給へば（181）

(34)a.　けさ城の内に管絃させられたはこの君でこそござるらう（277）

b.　此君ニテマシ＼／ケルニコソ（549）

(35)a.　たれぞ見知った者どもでこそあるらうとおぼしめされたれば（317）

b.　見知タル者トモニコソト（609）

ここで、Ⅰ～Ⅴの型の用例における、天草本のラウの前接語を調べてみたところ、(36)のとおりであった。

(36)	（形式動詞）アル	9
	（形式動詞）ゴザル	2
	（形式動詞）オハス	2
	思フ	4
	思シメス	4
	思ヒ出ス	1
	(心ノウチガ)頼リナイ	1
	アル	4
	申ス	1
	更ケユク	1
	計	29例

天草本に見られるウズが前接するラウのもととなった原拠本の表現は、次のⅥ～Ⅸの四つの型に分けることができる。

Ⅵ　（a.天草本）（ウズ）ラウ＜（b.原拠本）ラム：2例

(37)a.　さだめて搦手にやまはらうずらう（153）

b.　搦手ニモヤ回ルラン（353）

(38)a.　国にゐまらするかれらが妻子どもがさこそは歎きまらせうずらう（189）

b.　歎キ候フラメ（464）

Ⅶ　(a.天草本)（ウズ）ラウ＜（b.原拠本）（ムズ）ラム：5例

(39)a.　今さらいかなるおん目にかあはせられうずらうと言うて（37）

b.　いかなる御目にかあはせ給はむずらむ」となく（165）

(40)a.　いかほどか歎きまらせうずらう？（189）

b.　候ハンスラン（464）

(41)a.　あはや木曾が参るぞ何たる悪行をかつかまつらうずらうとあって（238）

b.　イカナル悪行カ仕ンスラントテ（488）

(42)a.　今度の軍に中将のいかなる目にかあひ給はうずらうとしづ心なう思はるるところに（285）

b.　イカナル目ニカ合玉ハンズラント（565）

(43)a.　その墓所の前で一定切られうずらうと大臣殿も（363）

b.　一定切レンスラント（713）

Ⅷ　(a.天草本)（ウズ）ラウ＜（b.原拠本）ム：2例

(44)a.　幾十万かござらうずらう（149）

b.　何ノ十万騎カ候ハン（350）

(45)a.　よしない都近い所はまたかく憂いこともや聞きまらせうずらう（309）

b.　此ク浮事モヤ聞カン（597）

Ⅸ　(a.天草本)（ウズ）ラウ＜（b.原拠本）（ナ）ムズ：1例

(46)a.　捨ておかせられて何たる目にかあひまらせうずらうと（119）

b.　イカナル目ニカアイ候イナンズト（263）

天草本に見られるツが前接するラウのもととなった原拠本の表現は、次のⅩ～ⅩⅣおよびそれら以外のⅩⅤという六つの型に分けることができる。これらのうち、Ⅹ～ⅩⅣの型の用例は木下1993にすべて挙げられているので、それぞれの存在頁のみを示す。

Ⅹ　（天草本）（ツ）ラウ＜（原拠本）ラム：2例

262＜524　394＜760

ⅩⅠ　（天草本）（ツ）ラウ＜（原拠本）（ツ）ラム：3例

231＜480　287＜568　352＜676

ⅩⅡ　（天草本）（ツ）ラウ＜（原拠本）（タル）ラム：3例

247＜498　260＜521　333＜644

XIII　（天草本）（ツ）ラウ＜（原拠本）ケム：12例

42＜169　68＜205　79＜229　81＜230　82＜231　148＜349　282＜557

310＜599　345＜667　361＜712　373＜735　381＜744

XIV　（天草本）（ツ）ラウ＜（原拠本）（タリ）ケム：2例

210＜399　329＜639

XV　（a.天草本）（ツ）ラウ＜（b.原拠本）X～XIV以外：1例

(47)a.　病とこそなっつらう（287）

b.　積リテ病ト成リ玉ヒタルニコソ（568）

第4章では、覚一本平家物語に見られる助動詞ラムが、天草本の対応する箇所でどのように表現されているかを調べることにする。

4

本章のために調査を行なった範囲は、覚一本平家物語の「巻第一」「巻第二」の全部および「巻第三」の冒頭から「僧都死去」までと、それにきわめて近いものを原拠としたと考えられている、天草本平家物語の「巻第一」の全部および「巻第二」の「第一」である（(5)参照）。調査の結果を表にすると、(48)のようになる。

(48)

		覚一本		
		ラム	（ムズ）ラム	（ツ）ラム
天	ラウ	6		
	（ウズ）ラウ		1	
草	ウ	2	5	1
	ウズ／ウズル	8	13	1
本	その他	7	1	

覚一本のムズもツも前接しないラムに対応する天草本の表現は、次のI～IIIおよびそれら以外のIVという四つの型に分けることができる。

I　（覚一本）ラム＞（天草本）ラウ：6例――(7)～(12)

II　（a.覚一本）ラム＞（b.天草本）ウ：2例

(49)a.　かたはらいたくもさぶらふらむ（96）

b.　いかほど恥かしうかござらう（95）

(50)a.　兵共六七千騎もあるらむとこそみえたりけれ（152）

b.　その夜のうちに西八条に兵ども六七千騎はあらうと見えた（22）

Ⅲ　（a.覚一本）ラム＞（b.天草本）ウズ／ウズル：8例

(51)a.　このぢやうでは舞もさだめてよかるらむ（97）

b.　この体では舞もさだめてよからうず（96）

(52)a.　太政大臣まで成あが（ッ）たるや過分なるらん（155）

b.　過分におりゃらうず（26）

(53)a.　人の讒言にてぞ候らん（157）

b.　人の讒言でござらうず（28）

(54)a.　たゞ一所でいかにもなるやうに申てたばせ給ふべうや候らん」と申されければ（168）

b.　ただ一所でいかにもなるやうにおほせられてくだされうずるかと言はれたれば（41）

(55)a.　命にかはらんと契たる侍共少々候らん（174）

b.　重盛が身に代り命に代らうずるとちぎった侍ども少々ござらうず（47）

(56)a.　みな御後悔ぞ候らん」と申ければ（176）

b.　ここでおほせられたことどもをも御後悔でこそござらうずれと（50）

(57)a.　都に待人共も心もとなう候らん（229）

b.　心もとなうござらうずるほどに（79）

(58)a.　むかへに乗物共つかはして待らんも心なしとて（230）

b.　人の待たうずるも心ないことぢゃと言うて（81）

Ⅳ　（a.覚一本）ラム＞（b.天草本）Ⅰ～Ⅲ以外：7例

(59)a.　夜ははるかにふけぬらむ（151）

b.　夜ははるかにふけたと見えたに（21）

(60)a.　誰もらしつらむ（156）

b.　たがもらいたか（27）

(61)a.　いかなるめにかあふらむと（158）

b.　子息の少将と幼い人人何たる目にかあはるると思ひやらるるにも（29）

(62)a.　おぼしめされ候らん（160）

b.　その縁に引かれてかう申すとおぼしめさるるか？（32）

(63)a.　今までしらせざるらむ」との給ひもはてねば（163）

b.　なぜに宰相のもとからは今まで知らせられぬぞと（35）

(64)a.　今更物をおもはすらん」とぞかなしみける（204）

b.　今さらものをば思はするぞと悲しむことははかりもなかった（67）

(65)a.　いかにしつらんとか思ふらむ（235）

b.　世をわたるよすがをばなんとしてせうとは思ふぞ？（88）

覚一本のムズが前接するラムに対応する天草本の表現は、次のⅤ～Ⅶおよびそれら以外のⅧという四つの型に分けることができる。

Ⅴ　（覚一本）（ムズ）ラム＞（天草本）（ウズ）ラウ：1例――(39)

Ⅵ　（a.覚一本）（ムズ）ラム＞（b.天草本）ウ：5例

(66)a.　末代いかゞあらむずらむ（87）

b.　末代にはなんとあらうぞと言うて（7）

(67)a.　物をおもはですぐさむずらんと（104）

b.　ものを思はいですごさうぞ？（103）

(68)a.　證人にやひかれんずらむとおそろ(ッ)しさに（152）

b.　行綱なましひなること言ひいだいて証人にか引かれうとおそろしさに大野に火を放いた心地をして（22）

(69)a.　「小松殿の御気色いかゞ候はんずらん」と申ければ（158）

b.　畏まって重盛の御気色何とござらうぞと申したれば（28）

(70)a.　成経も同座にてこそ候はむずらめ（164）

b.　それがし少将も同罪でござらうと（36）

Ⅶ　（a.覚一本）（ムズ）ラム＞（b.天草本）ウズ／ウズル：13例

(71)a.　都の外へぞ出されんずらむ（101）

b.　齢も衰へた身が都のほかへ出されうず（100）

(72)a.　又うきめをも見むずらん（102）

b.　また憂き目を見うず（102）

(73)a.　五逆罪にやあらんずらむ（103）

b.　深い罪にもならうず（102）

(74)a.　又うきめをもみむずらん（103）

b.　また憂き目をも見うずれば（103）

(75)a.　これかぎりで又御覧ぜぬ事もやあらむずらん」とて（164）

b.　これを限りでまた御覧ぜられぬこともやあらうずるとて（36）

(76)a.　命ばかりはさり共こいうけ給はむずらむ」となぐさめ給へ共（165）

b.　命ばかりはさりともこひうけられうずるとなぐさめらるれども（37）

(77)a.　矢をも一いんずらん（170）

b.　北面のともがら矢をも一つ射ようずる（43）

(78)a.　さすが以外の御大事でこそ候はんずらめ（174）

b.　さすがもってのほかの御大事でござらうず（47）

(79)a.　ひが事な（ン）どやいでこむずらんと思ふばかりでこそ候へ」との給へば（175）

b.　悪党どもが申すことにつかせられて僻ことなどがいできうずるかと思ふばかりでこそあれと（49）

(80)a.　入道が許へ射手な（ン）どやむかへんずらん」との給へば（176）

b.　これで言うたやうに清盛がもとへ討手などを迎へうずるかと（50）

(81)a.　我は近ううしなはれんずらむ（189）

b.　われは近う失はれうずと思ふ（63）

(82)a.　よき様に申事もあらんずらむと憑をかけ（216）

b.　よいやうに申しなさるることもあらうずとたのみをかけて（77）

(83)a.　歎きながらもすごさむずらん（238）

b.　歎きながらも過さうず（91）

Ⅷ　(a.覚一本)（ムズ）ラム＞（b.天草本）Ⅴ～Ⅶ以外：1例

(84)a.　唯都の外へぞ出されんずらん（100）

b.　都のほかへ出されうずるまでであらう（100）

覚一本のツが前接するラムに対応する天草本の表現は、次のⅨ、Ⅹの二つの型に分けることができる。

Ⅸ　(a.覚一本)（ツ）ラム＞（b.天草本）ウ：1例

(85)a.　いかにしつらんとか思ふらむ（235）

b.　世をわたるよすがをばなんとしてせうとは思ふぞ？（88）

Ⅹ　(a.覚一本)（ツ）ラム＞（b.天草本）ウズル：1例

(86)a.　一二千人もありつらん（180）

b.　したい（ママ）がひついた者ども一二千人もあらうずるに（54）

第5章では、益岡1991の提示した、「存在判断型」の文と「叙述様式判断型」の文との区別に基づき、天草本平家物語に見られる助動詞ラウの意味について考える。

5

益岡1991は、現代日本語における疑問文と否定文について、表現形式を異にする二つの型を認めている。一つは事態が存在するか否かの判断にかかわる「存在判断型」、

もう一つは事態の叙述様式が適切であるか否かの判断にかかわる「叙述様式判断型」である（p. 66）。(87)、(88)を見られたい。

(87)a.　選手たちは泣いていない。

　　b.　選手たちは泣いているのではない。

(88)a.　選手たちは泣いていますか？

　　b.　選手たちは泣いているのですか？

たとえば、(87)a. と(88)a. が「存在判断型」の文、(87)b. と(88)b. が「叙述様式判断型」の文ということになる。これをふまえて、益岡1991はさらに(89)のように述べている。

(89)　ところで、「存在判断型」と「叙述様式判断型」の区別は、疑問文と否定文についてだけ問題になるのではなく、肯定の断定を表現する文や断定保留を表現する文をも合わせた、真偽判断が関わる文全般に関連する区別である。それだけ、一般性の高い重要な文法概念である、ということである。

肯定の断定文については、次の例を見ていただきたい。

(15)　太郎は花子にプレゼントをした。

(16)　太郎は花子にプレゼントをしたのだ。

(15)は、太郎が花子にプレゼントをしたという事態の存在を断定する文である。これに対して、太郎がある人にプレゼントをしたことを前提として、そのプレゼントの相手が花子であるということを断定するには、(16)のような表現が用いられる。(16)は、事態の存在そのものは前提とした上で、その事態を表す叙述として、「花子にプレゼントをした」という表現が適切である、と断定している。(15)によっては、このような内容を表現することは困難である。

同じことが断定保留を表す文についても観察される。

(17)　太郎は花子にプレゼントをするだろう。

(18)　太郎は花子にプレゼントをするのだろう。

ここでもやはり、2つの表現形式が区別される。事態の存在そのものを問題にする場合と、事態の叙述として「花子にプレゼントをする」という表現が適切であるということを問題にする場合とでは、表現の仕方が異なるわけである。　（益岡1991：p. 66）

益岡1991の言う「存在判断型」の文における「断定保留」、「叙述様式判断型」の文における「断定保留」を、本稿ではそれぞれ「事態存在の推量」、「叙述様式適正の推

量」と呼ぶことにする。これに従えば、天草本平家物語の(90)〜(94)のようなラウは、叙述様式適正の推量を表わしていて、現代語のダロウ（事態存在の推量を表わす）ではなく、ノダロウに相当するものであると考えられる。なかでも(91)〜(93)は、情報の焦点が文の述語でない箇所（波下線部）にあり、叙述様式適正の推量を表わしていることがより明瞭な例である。

(90)　法皇をば鳥羽殿へ押し籠め参らせられうずるとぢゃが，内々は鎮西の方へ流し奉らうずると，議せられたと，きこゆると，申せば：重盛なぜにただいまさやうのことがあらうぞと，思はれたれども，けさの清盛の気色さるものぐるはしいこともやあるらうとて，車をとばせて西八条へいでられて，門前で車よりおり，門のうちへさし入ってみらるれば（天草本平家：p. 43）

(91)　さうあれば備前，備中の間遠うても，両三日には過ぎまじい：近いを遠う言ふは，成親卿のござる所をわれに知らせまいとてこそ申すらうとて，そのちは恋しけれども，問ひもせられなんだと申す（同：p. 59）

(92)　中宮御産のおん祈りによって，非常の赦おこなはる：しかるあひだ鬼界が島の流人少将，康頼法師赦免とばかり書かれて，俊寛といふ文字はなかったによって，礼紙にこそあるらうと言うて，礼紙を見るにも見えず，奥より端へ読み，端から奥へ読めども，二人とばかり書かれて三人とは書かれなんだ（同：p. 73）

(93)　木曾が勢はこの辺にこそあるらう，旗があるかさし上げてみよとあったれば，兼平が持たせた旗をざっとさし上げたれば，案のごとくこれを見て，京から落つる勢ともなう，瀬田から落つる勢ともなう，三百あまり馳せ集ったところで（同：p. 244）

(94)　平家は一の谷で残り少なう滅び，三位の中将といふ公卿一人生け捕られて上らるるときこえたれば，北の方この人に離れまじいものをと泣かるるに，ある女房が来て申したは：三位の中将と申すは本三位の中将のおことでござると申したれば，さては首どもの中にこそあるらうとて，なほ心やすうも思ひやらなんだ（同：p. 285）

中世後期の口語における、叙述様式適正の推量を表わす形式としては、モノ〔デ／ヂャ〕アラウがあった。(95)〜(97)は虎明本狂言に見られるものである（情報の焦点が文の述語にない場合、情報の焦点のある箇所を波下線で示した）。

(95)　其事身共もふ審がはれぬ、さりながらいつも酒をぬすんでのむに依て、此ことくにめされた物であらふと思ふが、なにとおもはしますぞ

（大蔵虎明本狂言集：ひの酒）

(96)　(主)「たぶんぶあくじやと思ふが、わごりよはせいばいもせいで、成敗したと云物じやあらふ程に、たゞおきまらすまひ　(太郎冠者)「是はいかな事、それはかくれもなひ事でござる物が、いつわりが申されうか、慥に成敗は致て御ざるが、お目がちがふた物でござらふ　（同：ぶあく）

(97)　(男)「せんどより今まで、小袖をかづゐていて、ついにとりまらせぬ、御存知のことく、わたくしのしよたいで、さやうにいたひてはまかりならぬが、なにといたひてようござらふぞ　(仲人)「それは尤じや、さりながら、はづかしさにとらぬものじやあらふ　（同：いははし）

(95)～(97)のようなモノ｛デ／ヂャ｝アラウは、判断実践文において用いられた場合に現代語のノダに相当する機能を果たしていた中世口語のモノヂャ（福田1998ａ参照）が、推量判断の形式を顕在化させたものととらえられる。

6

本稿での観察をまとめると、(98)～(101)のように結論される。

(98)　天草本平家物語に見られる助動詞ラウは、前接語が、形式動詞としてのアル／ゴザル／オハス、および思フ／思シメス等に偏っており、しかも大多数が係助詞コソの結びに用いられている。これが古典語ラムの現在推量の意味（事態存在の推量〈ダロウ〉と叙述様式適正の推量〈ノダロウ〉の区別がない）を受け継いだ、ラウの最後の姿と考えられる。

(99)　形式存在動詞のあとでも、特にコソが用いられていなければ、原拠本のラムを天草本でウ／ウズに置き換えた例が存在する。

(100)　天草本のラウは、前接語が(98)で指摘したものでない場合、原則的に叙述様式適正の推量を表わすようである。中世後期の口語資料には、叙述様式適正の推量を表わすモノ｛デ／ヂャ｝アラウが認められ、ラウと交替してゆく形式であった蓋然性が大きい。

(101)　天草本のツラウは、先行研究でも明らかにされてきたように、過去の事柄の推量（事態存在の推量〈タダロウ〉と叙述様式適正の推量〈タノダロウ〉の区別なし）を表わし、近松世話物などにも例が存することから、最も遅くまで使用があったものとみられる。

〈参考文献〉

木下書子(1993)「天草版平家物語における「つらう」について」『筑紫語学研究』4（筑紫国語学談話会）

清瀬良一(1982)『天草版平家物語の基礎的研究』(溪水社)

福田嘉一郎(1998a)「説明の文法的形式の歴史について――連体ナリとノダ――」『国語国文』67―2（京都大学）

福田嘉一郎(1998b)「現代日本語のノダと主体的表現の形式」『熊本県立大学文学部紀要』5―1

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』(くろしお出版)

村上昭子(1979)「助動詞ラウ――中世末期の用法」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』(勉誠社)

山口堯二(1991)「推量表現の史的変容」『国語学』165（国語学会）

山田潔(1995)「複合助動詞「つらう」の用法」『学苑』661（昭和女子大学）

〈付記〉

本稿は、第158回筑紫国語学談話会（1998/08/04、於九州大学九重共同研修所）での口頭発表を基にまとめたものである。御意見、御教示を賜った青木博史氏、江口正氏、江口泰生氏に御礼申し上げる。なお、本稿は平成10年度熊本県立大学地域貢献研究事業による成果の一部である。